



新感覚クロスワードパズル

下の文章を読んで、右ページのクロスワードパズルを解いてみましょう。

竹早探偵物語

青字の「言葉の破片」を使って、謎解きクロスの枠を埋めていくと、5文字のテーマが浮かび上がります。



問題編

還暦を迎えてから、昔のことを思い出すようになった。

たとえば伊豆の小さな島で、魚釣りをしたこと。早霜が降りるような、寒い日だった。岩場に立ったまま、母がもたせてくれたいなりずしを食べた。

あれは45年前、竹早高校に通っていた時期のことだが、今でも映画の1シーンのように鮮明に覚えている。

竹早は、望んで入った学校ではなかった。中学で成績トップの私は、小石川に進学すると思ひ込んでいた。そこは定められた区内だけではなく区外からも越境してくる、東大に行く生徒も多い進学校だったからだ。

合格発表の朝、夢を見た。友の胸倉をつかみ、言葉のヤリで攻撃した。

「何でお前が小石川なんだ。何でぼくじゃないのか」

その場の空気が凍り付いた。担任の女性教師がなぐさめてくれた。

「竹早だって伝統のあるステキな学校よ……」

それは、正夢となる。それまで上り電車しか乗らなかった自分が、これから下り電車に乗る……そんな感覚が襲ってきた。

小石川に比べ、竹早は施設面でも見劣りがした。その時代、竹早には体育館もなく、屋内スポーツの授業は東大の施設を借りて行われた。私たちはよく、本郷にある体育館までランニングをしたものである。

もっとも今では竹早高校でよかったと、心の底から感謝している。とくに私がいた時代の竹早には、他校にはない自由奔放な文化があった。

その空気に刺激された私は、柔道部にいながら文系のクラブ活動を探した。

生物部に行くと、後に詩人となる少女がいた。気になったものの、結局私は、幽霊部員で終わった。その代わり、美術の小野政吉先生を慕って美術部に入った。だがデッサンが苦手で、美術室は小野先生と雑談する場と変わっていく。

文芸部には興味があったが、そこで出していた同人誌は気に入らなかった。「群像・文藝界・文藝」などを買って読んでいた私にはもの足りなかった。

多くの授業は面白かったが、選択制が多く、午後の時間がポッカリ空くこともある。そんなときはバスに乗り、荒川の土手で寝そべて好きな小説を読み漁った。

夏休みには、地元の友人とつるんで夜遊びをした。そこで会うのは、いわゆる落ちこぼれで、高校の話は禁句だった。

た。竹早の名を出すと女子は褒められるが、男子は「アタマいいじゃん」と言われ「それって女子校だろ」とばかにされるに決まっている。そして私は、お決まりの酒・煙草・異性交遊……暗い穴に落ちて抜け出せなくなった。それでインドのヨガに救いを求め、体質を改善しようとした。身体から邪悪なものを抜きたかった。

昭和46年9月24日。16歳になった私は、鎌倉にいた。寺を散策するうちに髪を切りたくなり、床屋に入って頭を五厘刈に丸めた。そして鶴岡八幡宮を参拝し、神奈川県立近代美術館に向かう。その日に『荻須高德展』がスタートしていたのである。

荻須は、フランスで「外国人なのに、パリジャンよりパリの風景をよくとらえた」と絶賛された画家である。彼の描く絵の向こうには、工場の機械化が進む前のパリがあった。その絵はアル中のユトリロ、結核にむしばまれた佐伯祐三の描くパリとも異なっていた。

荻須の絵には、品があった。古い建物が解体されても、また古いレンガを使った建物を造るというような手間をかけ、伝統を守ってきたパリを愛する心があふれていた。その街は、人生の示唆にも富んでいて、なぜか古くて懐かしい家具のにおいがした。

会場に入ってから数時間後、小坊主になった私は、ある風景の前で動けなくなった。その絵は圧倒的な力を持ち、未熟な心にある板の間に土足で上がり込んできた。

ピカソの言葉に、こうある。

「5分みた感動と、1時間みた感動が劇的に違うなら、それは本物だ」

十代でパリにわたってルーブル美術館に立ち寄った岡本太郎は、ピカソの絵の前で立ち尽くした。まだ画家として発芽していなかった太郎は、涙が止まらなかった。ピカソの筆のリズムは恐ろしいほど速い。こんなに凄い絵描きがいたのかと、彼は震えた。

その数年後、油彩を学んだ彼は、もう一度ピカソの前に立った。だが1時間後には号泣していた。そして数年後。岡本太郎はピカソの絵の前において、もう3時間もにらみつけていた。深く感動はしたものの、そこに涙はなかった。過去2回で生まれた胸の痞えは、すっかりとれていた。

「自分もまた、誰もみたことがない芸術の道を歩こう」

とつぶやくと、太郎の心の底から、激しい闘志があふれてきた。

一歩も引かない私に、小さな老人は目をひんむいて野良犬を追ひ払うように「シッ!」という仕草をした。背広の男が私の右腕をとる。

竹早高校でみつけた「自由に生きる」という人生の**目的**は、その後、私の心の在り方を変えた。私は今、コンサルタントと作家という**二足の草鞋**を履いている。竹早時代に自由な風に吹かれなければ、別の人生を送ったことだけは間違いない。

変化の3年間 松本悠希乃 (簗115回生)

私がいた3年間は、いい意味でも悪い意味でも変わった3年間でした。入学当初は本当に「自由な」「自主自律」の精神に溢れた場所だったと思います。生徒は制服も髪色もみんなバラバラ。だけど、竹早生という自覚はあって、「竹早生の『勉強してない』は『勉強してる』」とはよくいったものです。ね、みんな?(笑)。行事で髪型が変わったって、翌日の教室では皆元通り。まさに「メリハリ」。これぞ竹早生のいいところだと思います。

先生たちもユニークで、国語の先生が白衣を着ていたり、デカイ鉛筆をもっていたり、「takadanobaba」でアクセントを教えてください…笑。でも、どの先生も生徒想いの素敵な先生でした。

こんな素敵な環境で、勉強も行事も部活も全部がんばって、素敵な仲間ができて…竹早に入って、私は180度変わりました。卒業する頃には竹早の「自由な校風」はだいぶ違うものになってしまったけれど、1年生の時「本当の竹早の姿」を知れたことも誇りに思っています(笑)。

今でも、竹早生とは、会うたびに変わらない安心感と、居心地のよさはお墨付きで、思い出話が始めれば、キリがありません(笑)。



■ヒント③ 【土手】→タテ24 《示唆》→ヨコ9 【家具】→タテ5 《痞え》→ヨコ13 【鳥】→タテ25 《板》→ヨコ12

後から気付いた縁の端 丸山常生 (簗74回生)

しばしば美術室を抜け出し、屋上で日向ぼっこをしていた。気ままにのんびり取り組んだ初めての石膏デッサンに、小野政吉先生が記された寸評は意外にも、「微妙な光の表現に驚く」。この時はまだ、まさか芸術の道を選ぶことになるとは予想だにしていなかった。サッカー部で活動し、天文学に興味があった。

その後いろいろ悩んだ末、進路を定めた矢先に重度の肺結核で長期入院し、一年留年。傷心癒えぬまま、放課後の薄暗い美術室であらためてデッサンを始め、先生の穏和な眼差しに潜む、自己に厳しい骨太な造形精神と接するようになった。

人生で輝くかどうかなど未だ私にはあずかり知らぬこと。いつ誰がどうやって判断するのか。しかし茫洋と広がる生きられる時空間に、たまさか光が射し込む(そこには陰影と奥行きも生じる)ことがあるのは感知できる。そして造形の深奥で作用する質量、振動、重力、さらに恩寵の驚きが立ち現れることも。

高校時代4年間の様々な断片的体験が、私にとって重々無尽の縁を成していたと気づいたのはずっと後年。くすんだ木炭紙の隅の小さな10文字の筆跡に、思いがけず再会した時だった。



■ヒント④ 【寺】→タテ2 《品》→ヨコ23 【インド】→タテ3 《ヤリ》→ヨコ20 【禁句】→タテ4 《発芽》→ヨコ17

音楽との出会い 青木輝雅 (簗74回生)

高校と言えば思い出すのは文化祭、授業合間に弾いていた音楽室奥のくたびれたグランドピアノ。音楽好きには、文化祭演奏は恰好な催し物、毎日あればと願った程。

高校に入った71年頃は、大衆文化が猛威を振った60年代を引き継いで正に百花繚乱。音楽も然り、豪雨のように目新しい物が降っては湧いた。

現代の音楽文化は、もはや時代を創るような影響力は持ち合わせず、性格やエネルギー量は変質した。あの時代の得体が知れぬ底無しエネルギー感を経験した事はかけがえない。勿論、僕に懐古趣味は無く、現代の音楽も大好きだけれど。

お陰様でか不幸にてか、僕は当時の音楽溶媒にやられて、その後回復が見られない。音楽は残照のように僕を覆い、それ以上興味を引く対象に巡り会えなかった。ドラマー目指す次男に「親父リズム悪いな。」と言われつつ、ギター手に取る日曜楽師である。

